

博士論文要旨

論文題名：自閉スペクトラム症と知的障害児者に対する機能的アセスメントに基づくトイレトレーニング

イトウ ヒサシ

伊藤 久志

本論文の目的は、自閉スペクトラム症と知的障害児者に対するトイレトレーニングに関して、機能的アセスメントに基づく個別化に焦点を当てて検討することであった。

第1章では、自閉スペクトラム症と知的障害の診断や障害モデルの変遷を概観し、専門家の保護者支援によるトイレトレーニングの意義を明確にした。

第2章では、自閉スペクトラム症と知的障害児者に対するトイレトレーニングの実践研究に関してメタ分析を実施した結果、実践研究の動向として、排便訓練の実践研究が乏しいこと、対象児者に応じた介入手続きの「個別化」が実践家に求められていることが明らかとなった。

第3章では、機能的アセスメントに基づく個別化を実施したトイレトレーニングの実践研究に関して動向を検討した結果、課題として、(a)排便を標的とした実践研究、(b)下着の刺激フェーディングやプロンプトとして用いた刺激のフェーディングを伴う実践研究、(c)多層ユニットの機能的アセスメントを実施した実践研究、の3つを挙げた。

第4章では、上記の課題を克服するために、自閉スペクトラム症と知的障害児者に対する機能的アセスメントに基づく個別化に焦点を当てたトイレトレーニングの実践研究を5つ提示した。

第5章では、第4章の5つの実践研究に関して、「個別化のバリエーション」「機能的アセスメントの過程の分析」「保護者と対象児者の相互作用」という観点で考察した。自閉スペクトラム症と知的障害児者に対する機能的アセスメントに基づくトイレトレーニングにおいて、「医学的・身体的問題の検討」「対象児者のABC分析」「保護者のABC分析」という流れで機能的アセスメントを実施することが有効であり、多層ユニットの機能的アセスメントを実施することによって、対象児者だけではなく、対象児者と保護者の双方にとって最適な個別化に至る可能性があることを示した。機能的アセスメントと個別化に関する今後の課題として、医学的・身体的問題に関するアセスメントや介入を含めた実践研究、保護者のABC分析に基づき内潜在的行動をメンタルケアした実践研究、長期的な波及効果をはじめとする社会的妥当性の検討が挙げられた。